飼育レポート

新しくコツメカワウソが仲間入り

飼育展示担当　櫻庭 美千代

今年から新しくコツメカワウソ2頭（わらび3歳メス、キトラ3歳オス）が仲間入りしました。

3月に札幌市円山動物園から来園したわらびは、外で過ごすのが初めてでしたが、2カ月近くかけて、展示場のプールに入るようになりました。今ではだいぶ慣れ、展示場を走ったり泳いだりする姿が来園者の目を引いています。さらに機嫌が良いとアクリル越しの来園者に積極的に近寄るなど好奇心旺盛なおてんばタイプです。

わらび

6月に鹿児島市平川動物公園から来園したキトラは、見ているとなぜか仰向けスタイルになってしまう少し変わったコというイメージがあります。こちらも室内の環境に少しずつ慣れ、人の目の前では絶対に食べなかった餌を食べるようになりました。はじめは怖かったザリガニも、最近では顔を挟まれながら格闘していますが、バリバリと音を立てワイルドに食べます。こんな個性豊かで愛嬌たっぷりの2頭にぜひ会いに来てください。

キトラ

スバールバルライチョウの羽の色

飼育展示担当　川本 朋代

冬羽の「白」

現在、大森山動物園ではスバ　ルバルラ-イチョウを2羽飼育していますが、冬羽と夏羽両方の姿のライチョウを見ることができます。スバールバルライチョウは、雪が積もる冬は天敵に見つからないよう雪にカモフラージュした白い羽になり、気温が上がって雪が溶ける夏には山肌に似た茶色い羽になります。

「どうして2羽の羽の色が違うのですか？」とよく聞かれますが、その秘密は展示場の照明にあります。スバールバルライチョウの主な生息地であるスバールバル諸島では、夏は太陽が夜になってもほとんど沈まない白夜となるため、生息地の夏の日の長さに似せて展示場の明かりをほぼ一日付けた状態にすると、ライチョウは「今は夏だ」と判断して羽が茶色になります。逆に照明が付いている時間が8～11時間だと、冬と認識して羽が白になります。

このように2羽の展示場の照明時間を変えることで別の季節の羽の色を見ることが出来るのです。是非、それぞれの違いを見に来てください。

夏羽の「濃」

プレーリードッグ ～苦節16年、初めて繁殖成功～

飼育展示担当　堀籠 麻子

赤ちゃん（3月31日）

当園でのプレーリードッグの飼育は2001年からふれあいコーナーで始まりました。

プレーリードッグの発情は年に1シーズンで冬のみです。発情が来ると気が荒くなり、妊娠出産すると人影や物音に非常に神経質になったり育児放棄したりと、プレーリードッグの繁殖は何かと難しいと言われてきました。

昨年までの15年間、なかなか繁殖することができず、2016年4月に担当になったときは正直かなりのプレッシャーを感じました。これまで繁殖に至っていないということは今までの飼育方法を見直す必要があると考え、繁殖経験豊富な他園に相談し、エサや体重、発情のサインなど細部にわたって気をつけて飼育するようにしました。

2017年2月、発情が来たであろう週に相性を見ながら何頭かのオスと同居させたところなんと「ジャイ」（オス）と「もっと」（メス）が交尾したのです。そこからはトントンと事は進み、あれよあれよという間に3月13日に出産し育児がスタート。もちろん、育児放棄しないように細心の注意を払いつつの飼育はしていましたが、私たちの心配をよそにすくすくと6頭の仔が育ってくれました。巣箱からモゾモゾと這い出してきた姿を見たときは本当にホッとし、やっと安心して寝られると思ったものです。

まだまだ大人よりは小さな体の仔達ですが存在感は大人よりも抜群で、今後も担当として賑やかな家族作りに協力していきたいと思います。今ではオス7頭、メス2頭、仔6頭の計15頭の大家族になったプレーリードッグたちに是非会いに来てください。

授乳の様子（4月25日）

ミーアキャットの繁殖

飼育展示担当　佐々木 祐紀

生後26日の赤ちゃん（8月15日）

7月19日にミーアキャットが出産しました。自然界でのミーアキャットの繁殖は主に群れの上位のメスのみが出産し、他のメスは手助けとして働く「ヘルパー」という役割に回るようですが、動物園ではなかなか同じようにはいかないようです。これまでも出産はしていたのですが、親が面倒をみなかったり、他の個体が邪魔をしたりで仔が成長することはありませんでした。

そんなこともあり、今回は妊娠が確認されたメスをあらかじめ群と分けて出産に臨みました。仔は全部で6頭、1頭は既に亡くなっていました。母親は意外に落ち着いていて、仔をお腹に抱え込む様にして順調の様に見えました。しかし、残念ながら数日後、4頭の仔は下に敷いてあった土を誤飲したようで亡くなってしまいました。残りの1頭は現在も元気に成長中で、親子で皆さんに見ていただくのは久々で7年ぶりのことです。このまま無事に成長してほしいと思います。

親子仲良く（8月30日）

動物病院から

3度目の新人時代

獣医師　長谷川 麻梨子

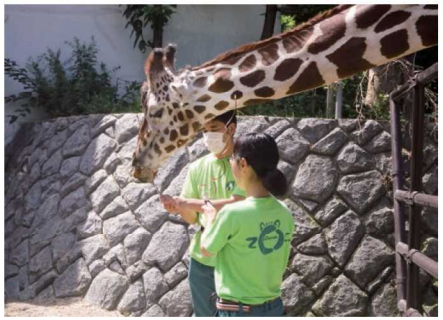
今年の5月から、大森山動物園に配属になりました。採用以来2回目の異動ということで、久しぶりに新人生活を送っています。

以前の職場とは全く異なる仕事で気力と体力を必要とする日々です。また、夏は紫外線と虫との格闘もあります。初めは動物舎の位置がわからず、園内マップとにらめっこしながら歩いたものですが、ようやく迷うことなく園内を移動できるようになりました。

さて、わたしは獣医師免許を持った飼育員ですが、動物の診察・治療といった臨床経験がありませんでした。ここにきて動物の命に対して責任がある臨床の世界に足を踏み入れることになり緊張しました。

しかし、一般的な臨床獣医師と異なり、「病気になった動物を治療する」ことより、「病気にならないよう健康管理・衛生管理をする」ことが動物園の獣医師が果たす役割であると教わりました。獣医師としてはもちろんですが、飼育員として毎日動物を観察し、変化に気づくことが出来る「目」を鍛えることが最優先事項だと思いました。

先輩の飼育員さんたちの観察能力の高さ、担当動物について知識を習得しようとする向学心の高さには脱帽です。動物の変化にいち早く気づいて動物を病気にさせない獣医師・飼育員を目指したいものです。


初めてのキリンの採血